

連載

# 45 在宅医療奮闘記

平成7年より  
在宅を開始した

私の思い出

(医)東西会 千舟町クリニック院長

橋本 満義 (64歳・内科)

末期がんの患者さんの人生に、  
哲学的で貴重な3ヵ月間のおつきあいとなった。



平成15年10月ころ、56歳の男性から突然の往診依頼がありました。当院のことは、近所に住まわっている在宅患者さんからお聞きになったようです。

ご自宅へ訪問したところ、その男性は痩せこけて

おり、体力が低下し、脱水傾向でベッドに横たわっていました。か細い声で「先生、すみません。数日前から食事が取れなくなってしまい、少し水が飲めるくらいなんです」と私に話しました。「進行胃がんの末期で、色々なところに転移しており手術もできない」と某病院の医師から説明を受けたとのこと。一年前には病名を告知されてたようですが、3ヵ月ほど

前から辛くて会社も休んでいたのです。できれば、辛い時に少し点滴をして欲しいとの要望でした。

病状を診て、毎日点滴をすることになりました。会社では技術主任なのでしょうか、点滴中も後輩からかかってくる電話に出て、親切丁寧に細々と指示をしていました。そんな気力がどこから出ているのだろうと思いつつも私は、自然と彼の人生に対し理解を深めようとしていたのです。

私は、言葉は発せずには彼に問いかけていました。「どうしたの？あなたには一体何があったの？奥さまはどうしてなくなったの？県外にいる息子さんが仕事が忙しいと帰ってこないのはどうして？一週間前に帰ってきた娘さんがよそよそしかったのはどうして？あなたはこんなに立派な人物なのに・・・」私の心の声ですから、当然答えてくれるはずもありませんが、在宅医療を続けていくうちになんとなくですが家庭事情がわかるような気がしました。

到着を待ち望んでいた息子さんは看取りの前日になんとか間に合いました。美人のお嬢さんは一生懸命お世話をされていましたが、「私は夜の仕事なので、どんな事情でも長くは休めないんです」と私に言い、患者さんは「娘は昔の嫁に似て困ってるのよ」と言いました。それを聞いた私はなんとも言えない喪失感に苛まれた気がしたのです。

その後、体力が著しく低下し、年を越した平成16年1月ころ、静かに旅立ったのです。最期、彼の枕元にいた息子さんと娘さんとかかりつけ医である私の間には一瞬の絆が芽生えました。そこには親子の情の深さがみられたのです。二人の目から流れ出る涙は輝いて、やはり美しき魂をもった家族であったのだと感じ入りました。

話は後先になりますが、在宅訪問時にこんなやり取りがありました。「最近、三途の川の手前で目が覚めたよ。先生、これって

臨死体験かねえ？」私は話を少しずらして答えました。「ソ連の宇宙飛行士ガガーリンが言ってましたよね、地球は青かったと。何も心配はいりませんよ。明日は我が身というからね」・・・これが答えになったのかどうか心配ではありましたが、その時の私には、それが患者さんへ対する精一杯のスピリチュアルセラピーだったのです。

彼は、まるで“武士の魂”のごとく誇り高き人生を歩んできたのだと、私には思えました。しかしながら、世間的にはいかに立派な行いであったとしても、家族には個々にそれぞれの人生があり、難しく割り切れない結果となりうる時代でもあるのでしょうか。キーワードは福沢諭吉の「公智、公德、私智、私徳」もありますが、やはり、生命論パラダイムの視座で時空を超えた絆や動物行動学で理解すべきなのでしょう。いずれにしても、家族の行いに正解・善悪はありませんが・・・。

「お医者さんが来てくれる」  
質の高い在宅医療・看護・介護  
を『千舟町クリニック』は目指しています。



Hyper Blood Viscosity(高血液粘度群)を科学する  
臨床生命科学(体質・病態学、栄養学)研究所開設

機能強化型・有床 在宅療養支援診療所

(医)東西会 千舟町クリニック

松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788  
http://www.touzaikai.jp/